

2023 年度 FD 活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会
委員長（学長） 小檜山 ルイ
副委員長（教務部長） 大畑 甲太

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでも、さまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2023 年度は、新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行したことを受け、教育効果が見込まれる科目を除き、対面授業を再開しました。大学 FD 勉強会では「Chat GPT 等生成系 AI とどう向き合うか」と題し、進化する生成系 AI について知るとともに、学生への指導事例なども取り上げながら本学における活用について考える機会をもちました。大学 FD 講演会では「卒業生による在学中の学びの評価」、「授業における『社会連携』の実践に向けて」をテーマとして開催しました。卒業生の実体験やアンケート結果から大学教育を考えることができました。また、新学部のコンセプトである社会とのつながりをより意識した教育の展開に向けて、他大学の講師から事例を交えて紹介いただくことで、社会連携について理解を深める機会をもつことができました。

さらには、2023 年度から導入したアセスメント・テスト「GPS-Academic」の分析報告会を開催し、分析結果を共有し、意見交換を行う場をもちました。

また、2023 年度も中期計画に沿って「各所管における FD 勉強会」を積極的に開催することとし、大学の FD 活動の活性化につなげることができました。

その他、例年どおり授業アンケートや学修行動調査、卒業生調査を実施し、学生の実態を把握するための情報収集に努めた一方、大学院では博士後期課程の学生に対して、教育能力向上のために FD 活動への参加を課すなどの取り組みも継続しています。

内容

大学 FD 勉強会「Chat GPT 等生成系 AI とどう向き合うか」	2,7
大学 FD 講演会「卒業生による在学中の学びの評価」	2,16
大学 FD 勉強会「授業における『社会連携』の実現に向けて	2,26
「2023 年度アセスメント・テスト分析報告会	2,33
学修行動調査	3
授業アンケートと授業改善計画	4
卒業生調査	5
PBL 科目の推進	5
大学院の FD 活動	5
2023 年度活動内容	6

大学 FD 勉強会「CHAT GPT 等生成系 AI とどう向き合うか」

概要

日 時: 2023 年 7 月 26 日(水) 18:10 ~ 19:30
会 場: オンライン(Zoom)
題 目: Chat GPT 等生成系 AI とどう向き合うか

詳細は、p.7 を参照ください。

大学 FD 講演会「卒業生による在学中の学びの評価」

概要

日 時: 2023 年 12 月 13 日(水) 17:00 ~ 18:20
会 場: オンライン(Zoom)
題 目: 卒業生による在学中の学びの評価

詳細は、p.16 を参照ください。

大学 FD 勉強会「授業における『社会連携』の実現に向けて ～フェリスの強みや特色をどのように活かすか～」

概要

日 時: 2023 年 12 月 18 日(月)16:30 ~ 18:00
会 場: オンライン(Zoom)
題 目: 授業における「社会連携」の実践に向けて
～フェリスの強みや特色をどのように活かすか～

詳細は、p.26 を参照ください。

「2023 年度アセスメント・テスト分析報告会 ～本学で教学マネジメントをどのように実現するか～」

概要

日 時: 2024 年 3 月 13 日(水)15:00 ~ 16:30
会 場: オンライン(Zoom)
題 目: アセスメント・テスト分析報告会
～本学で教学マネジメントどのように実現するか～

詳細は、p.33 を参照ください。

学修行動調査

2023年度も FERRIS 学修行動調査を実施しました。ALCS 学修行動比較調査は 2022 年度をもって終了し、代わりにベネッセ I-キャリアのアセスメントテスト「GPS-ACADEMIC」を導入しました。

【Ferris 学修行動調査】

目的	(1) 学生の学修状況(学修時間の実態や学修行動)の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 2 年次生・4 年次生
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能(9 月卒対象者は、Google フォームを使用)
実施期間	4 年次: 2023 年 9 月 21 日(木)～9 月 30 日(土) 9 月卒対象者 2 年次: 2024 年 3 月 20 日(水)～4 月 9 日(火) 4 年次: 2024 年 3 月 20 日(水)～29 日(金)
回答率	第 11 回: 49.0%(2024 年 3 月 22 日付在籍者数: 1,079 名、回答者数: 529 名) 2023 年度 9 月卒対象者含む(25 名) 参考: 43.2%(2023 年 3 月 22 日付在籍者数: 1,188 名、回答者数: 513 名) 2022 年度 9 月卒対象者含む(10 名)
設問の概要	(1) 時間の使い方 (2) 授業での経験 (3) 学修への取り組み (4) 授業に対する意識 (5) 入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6) 本学の教育への満足度 (7) その他

【GPS-Academic】

目的	(1) 学生の学修状況(学修時間の実態や学修行動)の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 1 年次生・3 年次生
実施方法	専用 Web サイト
実施期間	2023 年 4 月 7 日(金)～5 月 31 日(水)
回答率	84.7%(2023 年 5 月 1 日付在籍者数: 1,016 名、回答者数: 861 名)
設問の概要	以下の項目を通して、問題解決能力を客観評価・主観評価する。 ・思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力) ・姿勢・態度(レジリエンス、リーダーシップ、コラボレーション) ・経験(自己管理、対人関係、計画・実行)

授業アンケートと授業改善計画

2023 度も授業アンケート及び授業改善計画を実施しました。授業改善計画は、授業アンケート回答に対する担当教員からの応答により、学生が自身の今後の授業への取り組み方や学修活動の振り返りにヒントを得ることを目的としたものです。授業改善の参考資料として引き続き活用いたします。

【授業アンケート】

対象	全科目	
実施方法	FerrisPassport の授業アンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート(通常科目): 2023 年 7 月 17 日(月) ~ 29 日(土)
		授業アンケート(集中講義): 第 1 ターム 8 月 1 日(火) ~ 12 日(土) 第 2 ターム 8 月 25 日(金) ~ 9 月 7 日(木)
	後期	授業アンケート(通常科目): 2024 年 1 月 15 日(月) ~ 1 月 30 日(火)
		授業アンケート(集中講義): 第 1 ターム 2 月 2 日(金) ~ 2 月 15 日(木) 第 2 ターム 3 月 6 日(水) ~ 3 月 14 日(木)
回答率	(前期) 17.0% (後期) 13.6%	

【授業改善計画】

対象者	全教員	
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート(通常科目): 2023 年 8 月 1 日(火) ~ 8 月 22 日(火)
		授業アンケート(集中講義): 第 1 ターム 8 月 22 日(火) ~ 9 月 5 日(火) 第 2 ターム 9 月 11 日(月) ~ 9 月 25 日(月)
	後期	授業アンケート(通常科目): 2024 年 2 月 1 日(木) ~ 2 月 22 日(金)
		授業アンケート(集中講義): 第 1 ターム 2 月 17 日(土) ~ 3 月 8 日(金) 第 2 ターム 3 月 16 日(土) ~ 3 月 31 日(日)
提出率	(前期) 82.9% (後期) 74.6%	

卒業生調査

卒業生という外部の視点からも本学の教育の成果・効果を明らかにし、本学に対する期待、要望を把握することを目的として卒業生調査を実施しています。

大学時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業としては、毎年、語学科目や共通科目が挙げられます。自分の所属学科の科目だけではなく、幅広い関心を持つことの大切さを実感していることが分かります。また、本学で学んだ/出会ったことで今「とても役に立った」と思うこと（自由記述）の設問からは、大学で学ぶ知識や経験のほかにも、For Others の精神、様々な人との出会いを糧にそれぞれ社会で活躍されていることが分かる結果となりました。

また、2022 年度からは在学生に対して、このように様々な環境にいる先輩たちが、自身のフェリスでの学びを振り返った時に感じていることを共有して、より充実した学生生活を送ることができるようメッセージを発信しました。

今後、本アンケートを継続して、カリキュラムの一層の充実を目指します。

【調査及び結果概要】

実施期間：2023 年 10 月 20 日～11 月 20 日

実施方法：葉書で依頼し、web にて回答

対象人数：510 名（2018 年 3 月出学者）

有効回答：47 名（回答率 9.2%）

PBL 科目の推進

中期計画 21-25 PLAN のひとつである「PBL 科目の推進」として、PBL 科目における学生の活動経費（交通費等）の補助が挙げられます。

2023 年度は、支援対象科目 3 科目（履修者数 64 名）のうち、申請のあった 17 名に 41,124 円（予算執行率 41.1%）の支援を実施しました。

大学院の FD 活動

2020 年度より、教育能力向上を目的として、大学院博士後期課程学生にブレ FD を実施することが、大学 FD 活動計画に明記されました。対象の大学院生は、大学 FD 講演会や授業参観に参加して「FD 活動報告書」を提出しました。

授業参観に参加した大学院生は、演習形式のゼミの見学を通して、学生同士の意見が食い違った際の教員の対応（学生の混乱を落ち着かせる声掛け、意見が割れた理由の丁寧な説明、最終的な結論は学生自身が導けるような問いかけ等）から、学生の発表に対して、学生が間違っただけを言った場合にも「失敗した」という印象をもたせない工夫をすることの大切さを学び、自らの授業に生かしたいと考えました。

2023 年度活動内容

期間	テーマ、トピック	主催
4月8日(土)	FD オリエンテーション	英語教育運営委員会
6月初旬～7月中旬	前期授業アンケート実施(授業への要望)	大学 FD 委員会
6月12日(月) ～7月1日(土)	専任教員による授業参観(対象:専任教員担当科目)	大学 FD 委員会
7月中旬～9月中旬	前期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学 FD 委員会
7月12日(水)	FD 勉強会「校外実習終了者による経験談の共有」	日本語日本文学科 日本語教員養成講座
7月26日(水)	大学 FD 勉強会「ChatGPT 等生成系 AI とどう向き合うか」	大学 FD 委員会 情報教育運営委員会
8月初旬～9月下旬	授業改善計画	大学 FD 委員会
9月21日(木)～30日(土)	Ferris 学修行動調査(対象:4年次生 9月卒対象者)	大学 FD 委員会
9月27日(水)	FD 勉強会「学生主体の参加型の学びを実現するには」	音楽学部
10月4日(水)	FD 勉強会「授業における聴覚障害を持つ学生への対応について」	国際交流学部
10月中旬～11月中旬	教育の質向上に向けた取り組み - 卒業生調査	大学 FD 委員会
11月中旬～1月中旬	後期授業アンケート実施(授業への要望)	大学 FD 委員会
12月6日(水)	FD 勉強会「ティーチング・アシスタントの活用について」	国際交流学部 国際交流研究科
12月13日(水)	FD 講演会「卒業生による在学中の学びの評価」	大学 FD 委員会
12月18日(月)	FD 講演会「授業における「社会連携」の実践に向けて ～フェリスの強みや特色をどのように活かすか～」	大学 FD 委員会
1月中旬～3月中旬	後期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学 FD 委員会
2月初旬～3月下旬	授業改善計画	大学 FD 委員会
1月10日(水)	剽窃チェックツール「Turnitin」に AI ライティング検知機能等の新機能が搭載されたことに伴う講習会	大学 FD 委員会
1月20日(土)	FD 勉強会「本学を卒業した留学生が語る在学中の学びと就職活動経験」	留学生科目委員会
1月27日(土)	FD 勉強会「2024 年度から使用するスタンダード・コースのテキスト及び授業内容の方針変更について」	英語教育運営委員会
2月1日(木)	FD 勉強会「本学の初習外国語の現状と今後の展望」	初習外国語教育運営委員会
2月9日(金)	FD 勉強会「英語英米文学科専門科目における社会連携の可能性」	英語英米文学科
2月26日(月)	FD 勉強会「大学院生の業績づくりのサポート(学会発表、学会誌)」	人文科学研究科
3月11日(月)	FD 勉強会「あらためて共生を考える ～森・水・人・心～」	教職課程 コミュニケーション学科
3月13日(水)	アセスメント・テスト分析報告会 ～本学で教学マネジメントをどのように実現するか～	大学 FD 委員会
3月中旬～4月中旬	Ferris 学修行動調査(対象:2・4年次生)	大学 FD 委員会
4月～2月	教育の質向上に向けた取り組み - PBL 科目の推進	大学 FD 委員会
4月～3月	教育の質向上に向けた取り組み - 大学院の FD 活動	大学 FD 委員会

以上

2023 年度第 1 回フェリス女学院大学 FD 勉強会実施報告

大学 FD 委員会副委員長
教務部長 大畑 甲太

日程 2023 年 7 月 26 日 (水) 18:10 ~ 19:30

場所 オンライン (Zoom)

題目 「ChatGPT 等生成系 AI とどう向き合うか」

対象 本学教職員 (非常勤教員含む) 及び博士後期課程学生
高校教職員、大学教職員、一般の方

発表内容

- ・ ChatGPT の特性や活用にあたっての留意点
- ・ 履修学生への指導事例
- ・ 本学における ChatGPT 等生成系 AI の活用について

登壇者

渡邊 弘己 准教授

(国際交流学部・全学情報教育運営委員会委員長)

パトリック スコット ヘラー 准教授 (全学教養教育機構)

/ 小泉 泉 准教授 (文学部・英語教育運営委員会委員長)

遠藤 健太 准教授 (国際交流学部・初習外国語教育運営委員会委員長)

瀬藤 康嗣 准教授 (音楽学部・全学情報教育運営委員会委員)

ファシリテーター

大学 FD 委員会委員長 荒井 真 学長

同副委員長 大畑 甲太 教授 (文学部・教務部長)

出席者

専任教員 24 名、非常勤講師 1 名、博士後期課程学生 2 名、職員 28 名、外部参加 30 名

(アーカイブ視聴:24 名 視聴者のなかには当日出席者も含む)



講演会の概要

1. 開催にあたって: 大畑 甲太 大学 FD 委員会副委員長 (教務部長)

- 「ChatGPT」をはじめとする生成系 AI について、その革新的な技術は非常に有用である一方、利用に伴うリスクや懸念点も明らかになってきている。本学では、暫定的ではあるが学生に対して生成系 AI の利用、特に課題への利用に関する留意点や注意点をまとめた文書を FerrisPassport に配信し、注意喚起を行っている。
- 近年の生成系 AI の最近の進化は目覚ましく、今後の有益な利用方法やそれに伴う問題点、懸念点などがさらに明確になると予想される。今回の FD 勉強会では、生成系 AI の今後の展開を知るための第一歩として、5 名の教員に本学での具体的な活用例などを紹介してもらい、今後の展望を考えるための一助とした。

2. 大学における生成系 AI との向き合い方の指針: 渡邊 弘己 准教授 (国際交流学部・全学情報教育運営委員会委員長)

ChatGPT の概要と仕組み

- ChatGPT は、大規模言語モデル「LLM」の一種であり、OpenAI 社が開発した AI チャットボットである。現在は無料の GPT-3.5、月々20 ドルで使用できる GPT-4、ChatGPT の機能を拡張できる様々なプラグインなどが利用できる。
- インターネット上のデータを使用して学習した結果に、利用者のフィードバックを追加の情報として加えて学習データとする。ここで作成した学習データをもとに回答する。
- 「学習」では言葉を理解しているのではなく、「言葉のパターン」を覚えているだけ。回答は確率的にそれっぽいことを返す (例: 「馬の耳に」の次には「念仏」の確率が高い)。
- 生成系 AI の特徴を理解し、うまく活用することで強力なツールとして利用可能。

大学における活用について

- 本学でも生成系 AI の利用に関する学生向け周知文書が FerrisPassport で公開されている。
- 日本私立大学連盟からも 2023 年 7 月 24 日付で「[大学教育における生成系 AI の活用に向けたチェックリスト](#)」が公開されている。チェックリストには大学教育における検討事項を「全般」「教育」「環境・体制整備」の 3 カテゴリに分け、最優先事項と優先事項にさらに分類。
- チェックリストと本学の周知文書との比較
 - 「全般」はチェックリスト上の最優先事項 4/7 をカバー。
 - 「教育」面ではガイドラインの見直しは予定されているものの、未実施であり、個々の教員で工夫ができるように生成系 AI に関する理解の向上を図る必要がある。
 - 「環境・体制整備」は未実施。学生の利用状況を把握すべきである。
- 文科省などからもガイドラインやチェックリストが公開されている。
- 日本私立大学連盟のチェックリストは各大学や教員による運用に委ねられているが、ある程度はチェックリストに沿った運用を検討する必要がある。

3. ChatGPT 教育活用法を探る ~ フェリス女学院大学英語科目実践例より ~:

パトリック スコット ヘラー 准教授 (全学教養教育機構) / 小泉 泉 准教授 (文学部・英語教育運営委員会委員長)

UNESCO 「高等教育における ChatGPT 利用のガイド」の紹介

- [ChatGPT and artificial intelligence in higher education: quick start guide \[PDF\]](#)
- 上記 UNESCO のガイドライン Figure 1 において、はじめのポイントとして大事なものは、ChatGPT による答えが「正しい」必要があるかどうかということ。「正しい」情報が必要ない場合には、自由に使ってもそれほど問題ないだろうが、正しい解答が必要とされる場合には、注意して使用しなければならない。
- 高等教育の学習においては基礎的なリサーチ、計算、校正などシンプルなタスクから技術的なタスクまで ChatGPT の利用の幅は多様性に富んでいる。

英語の授業における ChatGPT の教育的利用

比較の例としての ChatGPT

学生たちはまず教科書を読み、それを参考にして、観光客に対し、浮世絵を説明するロールプレーを作る。ChatGPT が作成した対話モデルと比較。モデルと自分達の対話を比較し、違いと改善点を見出し、語彙力を

高めることができる。

対話の作成と例示

学生の習得状況に応じて、CEFR (The Common European Framework of Reference for Languages) レベルに合わせて調整できる。

③ ライティングのチューターまたはライティング評価

ChatGPT に質問することで、学生は自分で書いた段落をどのように改善したら良いかを尋ね、参考にすることができる。

新しい単語や、イディオムの発見

学生に新しい単語やイディオムのリストを CEFR レベルに合わせて提示することができる。単語リストは、あらゆるトピックや状況に合わせてカスタマイズ可能。

個人指導

文法や語彙などの苦手な分野について学生は個人的に指導を受けることができる。

まとめ

- ChatGPT を活用することにより、効率的なさまざまな学習が可能となる。その上で注意すべき点は、AI が作成したものをそのまま利用するのではなく、それを一つの案としてベースに用い、参考にしながら自身の考えに合うように修正したり広げたりして、「カスタマイズ」する力が重要。
- そのためには、学生側が生成系 AI の理解を深め、それを活用できるようリテラシー教育も必要である。
- 今後は、変化していく教育状況にどのように反応していくかをポジティブに考え、学生も教員も効率的に利用していく方法を考え続けていくべきである。

4. AI 時代の情報リテラシーと研究・教育での活用に向けた検討: 遠藤 健太 准教授 (国際交流学部・初習外国語教育運営委員会委員長)

生成系 AI のリスクについて

- AI はメリットだけでなく、深刻なリスクも生じさせる可能性がある。
- G7 広島サミットを機に始まった広島 AI プロセスでは、偽情報への対応が最重要課題の一つとされた。
- AI による偽情報の問題が国際的に共有されている。AI による生成物 (画像、音声、動画等) が現実と見分けがつかないようになり、フェイクニュース等が自動生成・拡散される事例が存在。偽画像の拡散により、株価に影響が及ぶ事態も発生している。

生成系 AI の嘘 (hallucination) を情報リテラシー教材として有効活用する

- AI の出力する情報を批判的に読み、有効活用するための新しい情報リテラシーが必要。
- 生成 AI の「嘘」を情報リテラシー教材として活用できると指摘する研究者もいる ([MIT Technology Review の記事](#))。
- 授業での実践例
 - ChatGPT にレポートの草稿を出力させ、そのファクトチェックを学生が行う。
 - 学生にチャット履歴を提出させ、教員がそれを見て助言する (優秀な学生は、「～はなぜですか ?」「～と～の違いは何ですか ?」「要するに～ということですか ?」などの問いを反復する傾向があり、それがリサーチクエスションの設定につながる)。

プロンプト (AI に対しての指示や命令) をどう考えるか

- 生成系 AI の普及に伴いプロンプトを作る技術 (プロンプトエンジニアリング) がこれから重要になる、ということがよく言われているが、専門知識がない人でも自然言語で指示を出せることが生成系 AI の魅

力。

- プロンプトの基本は、あくまで正確な文章で明確に意図を伝えることであり、それは人間とのコミュニケーションと同じなのではないか。
- ChatGPT と適切に意思を疎通するには、論理的な思考力と記述力が必要になり、ChatGPT を使うことを通じてそれらを鍛える機会になるのではないか。

生成 AI について (文系の) 大学で真面目に議論すべき理由

- 生成系 AI は社会科学や人文学にとって極めて重要な諸問題を提起している。
- 政治、経済、国際関係、安全保障への影響、性的・人種的な偏見やステレオタイプの再生産をいかに回避するか、教育拡散の是正、障害者支援、気候変動対策への貢献の可能性など。さらには根本的に人間 / 知性 / 感情 / 創造性 / 学問 / 教育 / 語学 / 芸術 / 文学 / 労働とは.....ということを考える格好のテーマになるのではないか。
- 人文系から社会科学系まで幅広い分野の専門家の先生方が集まっている学際性のある大学として、生成系 AI に関する包括的な議論をもっと盛り上げたらよいのではないか。

5. 生成系 AI によって音楽(教育)はどう変わるのか: 瀬藤 康嗣 准教授(音楽学部・全学情報教育運営委員会委員)

生成系 AI によって音楽 / 芸術は、どう変化してきたのか

- 1990 年代には、作曲家のスタイルを模倣する AI はかなりの完成度で発表されていた。
 - David Cope による [バッハ \(YouTube リンク\)](#)、モーツァルト、[ショパン \(YouTube リンク\)](#) らの作風模倣
- 2017 年には、メロディーとボーカルパート以外、いわゆる「カラオケ」的なものを AI に作らせ、その上でそのコード進行に合うようなメロディを作って歌うという楽曲が発表される。
- 生成系 AI によって作成された音楽は、個人的には"当たり障りのない"音楽と感ぜられる。しかし、YouTube では毎分 500 時間分の動画がアップロードされており、動画の背景音楽としては役立つ。

生成系 AI によって音楽 / 芸術教育は、どう変化するだろうか

- 実用的音楽 (つまり用途が明確な音楽) ならば AI で作ることができる。
- 生成系 AI によって音楽がどう変わるかを考えると、AI は補助的な役割を果たし、人間が主体となる必要がある。DJ / キュレーター / 調整役を人間が担うためには、音楽的知識がある程度必要になる。
- 技術による表現の変化の例として、視覚表現の分野では 19 世紀に写真が登場したことで写実的な絵画の価値がなくなり、現実をそのまま映しとるのではなく抽象的な表現が出てきたという側面がある。
- 写真が抽象画の登場を促したように、生成系 AI の出現によって、生成系 AI に決定的に欠けているが故に、精神性と身体性が、音楽において重要になると予想される。

6. 質疑応答

質問:

絵画において、写真の出現によって抽象画が生まれたように、生成系 AI により生み出される音楽の出現により、新しい音楽が生まれる可能性がある」と発表で話されていましたが、これからの音楽はどのような方向に進んでいくと考えますか？

回答:

音楽は元々宗教的な行為、儀礼、求愛行為などと共にあった。複製技術の登場（楽譜出版、レコード、CD など）により 19 世紀にはいって音楽の商業化が始まった。しかし、これは一時的なことであり、今後はその以前の状態、つまりお金になる音楽ではなくて心とか共同体が豊かになるような音楽を人々が求めるようになるのではないかと。音楽活動とか文化活動が盛んなエリアでは、犯罪発生率が低いというデータもある。音楽を奏で、人々と心豊かに交流する社会が豊かだと個人的には思う。

質問:

（登壇者全員に対して）ChatGPT 等の生成系 AI が普及するなかで、教員の役割は今後どうなると考えますか？

回答:

- 教員の役割は「盛り上げ役」のようなものになるのではないかと。授業を一緒に楽しみ、学生たちと共に新しい知識を探求する役割が重要になると思われる。
- 上記と同様に、教員の役割は一緒に探索し、冒険する「ファシリテーター」になるのではないかと。教育が「上から何かを教える」から「一緒に学ぶ」にシフトしていると感じている。
- 教員の役割は情緒的な部分、つまり心の温かさを大事にする方向に戻ってほしい。また、一生懸命に努力する姿勢を重要視したい。
- 教員の役割は重要であり続けるが、将来はまだわからない。伝統的な教育の評価方法は変わる可能性があるのではないかと。

7. まとめと今後の展望: 荒井 真 大学 FD 委員会委員長（学長）

- 渡邊先生の発表を通じて、我々の学び舎において AI との関わり方に明確な方針やガイドラインの確立が必要であることを強く感じた。また、小泉先生とヘラー先生の共同発表からは、通常文を対話に変換したり、言語レベルを設定する技術について新しい知見を得ることができた。遠藤先生からは生成系 AI のリスク及び AI の嘘をどのように教材として用いるか等について、瀬藤先生からは音楽の観点からの AI の役割について興味深い発表がなされた。
- 自分自身、人間の思考と生成系 AI の間に存在するかもしれない類似性について考察している。特に、AI が提供する情報の真実性に疑念を持ち、真実を探求する学習の重要性を感じている。さらに、外国語のコミュニケーションの中では身体性が重要であり、AI にはそのような身体性や精神性が欠けていると感じる。
- 最後の質疑応答での「教員としての役割」に関して、教員は知識の量よりも、その知識をどのように応用し、学生たちの好奇心をどう育てるかに焦点を当てるべきだと考える。

発表についての感想

渡邊 弘己 准教授

学内

- プロセス評価という部分をもう少しお聞きしたかった。よく質問力が必要と言われるが、そのようなことでしょうか。
- 最近出たチェックリストに触れたご発表で、動向も含めて参考になりました。
- 学内の取り組み状況がわかった。
- とても有益な情報をたくさん提供していただきました。紹介していただいたフェリスの指針や私大連盟のチェックリストを、HPなどでわかりやすくアクセスできるようにしてほしいと思いました。
- 大学として生成系 AI に関するガイドラインを立て、適宜見直していく必要があると思いました。
- 教育の中での ChatGPT の活用について、検討すべき項目が理解できました。

学外

- 全体的な説明は必要なので、いいと思いました。
- 貴学の学生・教職員に対する指針や、私立大学連盟の AI チェックリストに関する事など、種々の情報を示していただきありがとうございました。
- 生成系 AI についての初歩的な知識（枠組み）からお話し下さり、門外漢にとっては非常に有り難いお話でした。また、日本私立大学連盟のチェックリストなど、御発表の中で各種の資料を御紹介下さったことが、とても参考になりました。本学ではこれから生成系 AI の指針を策定していくところであり、大学として優先的に取り組むべき内容のヒントを得ることができました。
- ガイドラインがあるということを知れたことがとても役立ちそうです。ありがとうございました。
- 私大連の生成系 AI の活用に向けたチェックリストの存在を知らなかったため、非常に勉強になりました。また、チェックリストと比較することで貴学の立ち位置をわかりやすく説明されておられ、そちらもあわせて勉強になりました。

パトリック スコット ヘラー 准教授 / 小泉 泉 准教授

学内

- ありがとうございました。
- 論述文を会話文に直すこともできるのは驚きでした。ただし、ChatGPT の英語がネイティブ並のレベルにあるかどうかは気になりました。
- 語学教育への使用例も提示したご発表で参考になりました。
- レポートや論文といった、執筆内容の典拠を要する文章執筆とは違い、語学の場合は利点も問題点も、よりシャープに出てくるという印象を持った。自然な言い回しや語彙を豊かにするための ChatGPT の活用というのは思いも寄らない使い方で、面白かった。
- 英文ダイアログが GPT により一瞬でできる、かつ、言語水準も担保されている、となると、入試や各種検定の作問作業等の参考にもなりうることは、驚きでした。
- ユネスコの取り組みを知ることができた。
- 授業の実践が興味深かったです。英語を学ぶ意思のある学生にとっては非常に有用なツールになりますが、ただ単位（と成績）が欲しいだけの学生が翻訳機能を使って簡単に課題を仕上げてもできると思うので、そのような学生への対処をどうしているか伺いたいです。

- 英語学習における具体例を提示してくれており、とても参考になりました。
- 対話は特にその人の特性があらわれるので、正しいかどうかということだけでなく、発音や抑揚、さらには非言語的コミュニケーションがさらに大切になるのではないかと思います。
- 工夫次第で教育の中で ChatGPT から様々なサポートを受けることができることを知りました。

学外

- 英語、他の外国語、また日本語において、種々の文章表現をさせる上では、ChatGPT は有用と思います。ChatGPT は、学術的な知識よりも、(現時点では)言語教育においてもっとも役に立つのかもしれませんが。
- 英語教育における AI の活用実践については、専門外なので今一つピンとこなかったのですが、ユネスコの資料に基づいた AI の教員側と学生側の活用方法のお話については、とても参考になりました。本学では指針を策定するにあたり、生成系 AI の使用を制限するような内容だけでなく、効果的な活用にも言及していきたいと考えているので、ユネスコの資料の存在を知れたことは、とても有り難かったです。
- 授業や受講生のレベルに応じて、生成系 AI の質問の内容を変えることができるため、インクルーシブ教育に非常に有用な方法だという印象を持ちました。また、ユネスコのガイドラインは知らなかったため、勉強になりました。

遠藤 健太 准教授

学内

- 学生に、履歴を提出させるというアイデアは、すでに教育に取り入れられている先生ならではのものだと思います。
- ファクトチェックという使い方が面白いと思いました。
- (生成系 AI が作成した文章の) 根拠資料を探す作業に導いている点が参考になりました。
- Chat GPT に頼るのではなく、それが吐き出した情報を精査する学びというのは非常に興味深い。
- 未発表となった各生成系 AI の使用感に基づく自己評価も是非お聞きしたかったです。
- 学生、授業への取り扱いがわかった。
- 授業での実践例(学生にファクトチェックをさせる)はとても参考になりました。時間の関係で省略された部分も聞きたかったです。
- ChatGPT の扱いに関して、「今後は知識の量や教え方の上手さ以外の部分で教師の資質が問われる」というあたりは参考になりました。
- 学生にファクトチェックをさせるという授業はおもしろいと思いました。
- 生成系 AI によって蔓延するフェイク情報に対処したり、活用したりするためにもリテラシー教育が重要になってきていることが理解できました。
- 素晴らしい内容でした。時間の関係で飛ばした内容についてもぜひ伺いしたいです。

学外

- 学生とのやりとり・事例を紹介いただいた点と説明の仕方が、とても上手でした。
- 私も前期の授業において、ChatGPT の出力する情報に関する誤り・問題点を学生に指摘させるということを行いました。現時点では、ChatGPT が相当な間違いを出力する(してくれる)のですが、今後数年で AI は大きく学習し、かなりの精度で学術的に根拠のある情報を出力するようになるのではないかと考えております。そのとき、どのように教育・研究に生成系 AI を利用すべきかを考えるべきでは……と考えています。
- 文章生成の AI の特性や留意点(質問入力 回答出力)などについて、具体的に知ることができ参考になりました。また、生成系 AI を使いこなすには、教員および学生の両方にリテラシー能力が必要であることがわかりました。
- 生成系 AI が、人文・社会科学系の学問にさまざまな疑問を投げかけているという点に賛同いたします。

瀬藤 康嗣 准教授

学内

- 精神性や身体性への回帰という部分で、納得できた部分がありました。
- ポスト ChatGPT の音楽のあり方について興味があります。
- カメラと印象派のこと、表現や鑑賞と主観の問題について共感しました。
- クリエイティブな作品というのは、時に既存の音楽理論から逸脱したところに魅力がある訳で、AI のつまらなさ、というのは「優等生」すぎるということに由来するのかもしれない。「身体性」については、AI によって作られた音楽を楽譜にして人間が演奏した場合はどうなるのか、というところが気になるところでもある。
- 「精神的、身体的」な部分に人間の存在する意味合いがあるという見解は、理解が深まりました。
- 音楽に関する取り組みの状況がわかった。
- 芸術系分野におけるお話でしたが、感情や身体の役割について、他の分野の教育においても重要な示唆を含んでいました。
- 心を揺り動かすような音楽は AI には作れないということで、今後ますます人間の感情や独創性が重要になると思いました。
- 音楽分野での生成系 AI の果たす役割と、それによる音楽界や音楽教育の変化の可能性について知ることができました。

学外

- フェリスらしい（音楽学部があること）テーマで面白かったし、分かりやすかったです。
- 音楽をはじめとして、芸術全般に関する問題であるかと存じます。出力される作品に対する評価もさりながら、「権利」の問題が、今後のもっとも大きな課題になるかと思いました。
- 音楽および音楽教育は専門外なので、よく理解できないところもあったのですが、お話自体は興味深く聴かせて頂きました。特に現在の状況を写真が登場してきた時の絵画になぞらえていらしたことは、非常に興味深かったです。
- 商業的音楽は衰退し、「今後は音楽は人とのつながり確かめるものとなる」は非常によく理解できた。他の先生より良かった。
- 作曲に関しては、1990 年代以降から既にある程度は利活用されていたというお話が非常に興味深かったです（ご紹介された URL で実際に視聴しました）。また、生成系 AI に対する人間のアドバンテージが身体性というご意見に賛同いたします。

勉強会全体に関する感想

勉強会全体に関する感想

学内

- 最初のキックオフミーティングとしては、とても良かったと思えました。第 2 弾があると面白いと思います。
- 各先生方で違う視点での内容だったため、様々な見解を知ることができた。また、教育のみだけでなく事務においても活用方法について検討してみたいと思った。
- 問題点については容易に考えうる ChatGPT ではあるが、積極的に活用する視点がいくつか提示されたのは良かったと思う。
- 各先生方の発表を通じて感じたことは、生成系 AI は私たちの生活や頭脳労働の一部をより効率的にしてくれる。が、最終的な判断やハルシネーションを防ぐためにあたっては、学修行動や各専門分野を極めた教員

による学問の魅力や享受された知識が必須であり、教員はファシリテーターの役割にシフトすると同時に、専門分野を極めた先人としての矜持を学生たちに引き続き還元し、学生たちが学びを深める、という従来の役割は引き続き変わらないのかなとイメージしました。現在の学生たちは、通常の学修や研究だけにとどまらず研究の道具として生成系 AI を使いこなして、よりよい研究成果を発表していくというスタイルが一般的になっていくのではないかと、とも考えました。本日の勉強会は知的好奇心が深まるよい勉強会だと思いました。

- 個々の講話時間が短いように思えた。
- 全体に、大変有用で興味深い勉強会でした。
- 自身 ChatGPT については初心者ですが、人間と機械の棲み分けについて考えるよい機会となりました。
- それぞれの先生方の活用方法や考え方を伺えて、非常に参考になりました。
- さまざまな分野から論じてくださった先生方のお話がどれも興味深かったです。生成系 AI を上手に利用するよう指導し、学生と一緒に議論できるよう、努めたいと思います。
- 大学における生成系 AI の影響や課題などについて、様々な角度から説明がなされ、大変勉強になりました。
- 卒論とレポートの指導が難しくなることが心配です。具体的にはどうしたら適切に学生の努力や成果を教員がはかることができるのか、アイデアを教えてください。

学外

- 精神性、身体性が今後大事になるという話しが印象に残りました
- 先生方が「ぜひ、この場面で事務職員に生成系 AI を使用してほしい」と思っていらっしゃるおとがあれば、ご教示いただきたいです。
- 学外にもオープンにいただき、感謝しかありません。
- 多様な分野を扱っていたので、大変勉強になりました！
- 生成系 AI について、さまざまな面からの発表を聴けたことがよかったです。中には専門外で理解が追いつかない内容もあったのですが、その一方で普段は触れることのない専門外のことを知ることができ、大変勉強になりました。どうもありがとうございました。
- 大変興味深く聞かせていただきました。今後も多くの FD 勉強会の発信をよろしくお願い致します。
- "教員の立ち位置がファシリテーターであるというご見解が大変興味深かったです。
- 本学の教職員に今回の FD の内容について展開したいところですが、それが叶わず(スライドの共有/公開等がなく)非常に残念です。"

以上

2023 年度フェリス女学院大学 FD 講演会実施報告

大学 FD 委員会副委員長
教務部長 大畑 甲太

日程 2023 年 12 月 13 日 (水) 17:00 ~ 18:20
場所 対面 (2405 教室)・オンライン (Zoom)
題目 卒業生による在学中の学びの評価
対象 本学教職員 (非常勤教員含む) 及び博士後期課程学生
高校教職員、大学教職員、一般の方

発表内容

- ・卒業生アンケート分析結果
- ・フェリスのキャリア教育・就職活動紹介
- ・卒業後のキャリアパスと学びとの関連

登壇者

K.R 氏 (2015 年度国際交流学部国際交流学科卒業生)
S.H 氏 (2016 年度音楽学部演奏学科卒業生)
上原 良子教授 (国際交流学部・全学教育担当副学長)
有村 祐美子課長補佐 (就職課)
敦賀 亮太係長 (学長室)

ファシリテーター

大学 FD 委員会副委員長 大畑 甲太 教授 (文学部・教務部長)
上原 良子教授 (国際交流学部・全学教育担当副学長)

出席者

専任教員 17 名、非常勤講師 3 名、博士後期課程学生 0 名、本学学部生 3 名、職員 32 名、外部参加 57 名
(アーカイブ視聴:82 名 視聴者のなかには当日出席者も含む)



講演会の概要

1. 開催にあたって: 大畑 甲太 大学 FD 委員会副委員長 (教務部長)

- 本学では、卒業から 5 年経過した卒業生を対象に、教育成果の把握を目的とするアンケート調査を実施し、在学中の学びが現在のキャリアにどのように生かされているかを確認している。
- 今回の FD 講演会では、この分析結果を教職員で共有することが発端ではあったが、実際に卒業生や就職課スタッフの生の声を聞くことで、在学中に学んだことがどのように活かされているか、より深く知ることができるのではないかと考え、今回の講演会を企画した。
- 今回登壇する卒業生 2 名のうち、1 人目は K.R 氏。本学卒業後、大学院修了、専門学校卒業を経て、現在はフリーランスでテレビ番組やミュージックビデオ等の演出に携わっている。
- 2 人目は S.H 氏。本学卒業後、コンサート・演劇等のプロモーション企業で勤務。本業の傍ら、ヴァイオリニストとしての演奏活動や音楽教室講師を務めている。

2. 卒業生アンケートの分析結果: 敦賀 亮太係長(学長室)

調査概要

実施期間: 2023年10月20日~11月20日

実施方法: はがきで依頼し、webにて回答

対象人数: 510名(2018年3月出学者)

有効回答: 47名(回答率9.2%)

基本データ/現在の仕事・生活への満足度

- 年齢は25~29歳。フルタイム被雇用者が多い。
- 現在の仕事・生活には多くの方が満足している。
- 大学への満足度、知人・後輩へのおすすめ度も高い。

仕事での重要性/不足している能力、大学で身につけた能力

- 仕事での重要な能力は「一般的な教養」「人にわかりやすく伝える力」「他の人と協力して共通の課題に取り組む力」の順番が多い。
- 不足している能力は「外国語」「伝える力」「専門分野の知識・理解」「プレゼン力」がほぼ横並び。
- 大学で身につけることができたのは「一般的な教養」が最も多く、「人脈」「専門分野の知識・理解」と続く。
- 「人にわかりやすく伝える力」「他の人と協力して共通の課題に取り組む力」は、仕事で重要であると認識している回答が多い。その一方で、大学で身につけることができたとする回答が少なく、差が大きい。

授業科目について

- 熱心に取り組んでおけばよかったと思う授業は「語学科目」が最も多いが、自由記述では「語学科目を頑張った」という回答もあった。
- 在学中の熱心さは、科目による差はあまりない。
- 「語学科目」「卒業論文」「他学部他学科科目」は、卒業後の役立ち度が低い結果となった。

フェリス女学院で学んだ/出会ったことのうち、今になってとても役に立ったと思うこと

- 自由記述の内容を分類すると「語学」「経験・チャレンジ」「友人関係」に関する記述が多数見られた。
- 語学: 学生時代に中国語をとって楽しかった思い出があり、中国語検定を取るために社会人になってから再び勉強した。語学の専門学科でなくても、ハイレベルな語学教育を受けられた等。
- 経験・チャレンジ: 経験できる機会がたくさんあり、受動的な学びではなく自発的・能動的な学びができたこと等。
- 友人関係: 高い向上心や芯の強さをもった友人に出会えたこと、卒業後も付き合える友人ができたこと等。

3. フェリスのキャリア教育: 上原 良子教授(国際交流学部・全学教育担当副学長)

フェリスの学びの特徴

人文・社会科学系のアカデミックなカリキュラムが中心となっている。また、音楽学部を有していることから、芸術や感性の教育を重視している。このような大学の場合、一般的に教養だけに偏るのではないかという心配がある。その一方で、職業教育やビジネスなどの実学に偏った教育という問題もある。フェリスとしては、どちらも追求したいと考えている。そのため、各学科の学びからキャリアへいかに橋渡しをしていくかが必要になっていく。

正課外でのキャリア支援

- 就職課を中心とした手厚いキャリア支援を行っている。少人数制を生かし、一人ひとりのニーズに対応した

きめ細やかな支援（個別面談等）を実施している。

- 大企業、有名企業だけでなく、中小企業や優良ベンチャー、芸術系やエンタメ系など、さまざまな進路をサポートしている。
- 就職決定率は高く、内訳としては総合職 6 割、専門職 2 割となっている。「女子大 = 大企業の腰掛け OL」というイメージは過去のものとなっている。
- 学友会・学祭以外にも、新入生歓迎から各学部学科の講演会、センター等の運営を通じて学生リーダーの育成にも力を入れている。

正課内でのキャリア支援

1 クラス 10~20 名の少人数の演習系科目を 1~4 年次まで設けていることも特徴の一つ。

4. 就職活動における学びの影響: 有村 祐美子課長補佐（就職課）

- 最近の就職活動では、エントリーシートの他、自己 PR 動画を求める企業も増えてきている。自己 PR や学生時代に力を入れたことをアピールする必要があるが、「ネタがない」「何も書けない」という学生が 10 年前よりも減ってきた印象を受ける。
- これは、何かを経験することで成長するという経験学習のサイクルが、学生時代にできているからではないかと考えている。フェリスでは少人数でのグループワーク授業やディスカッションも多く、学生一人ひとりに何らかの役割が与えられる。さまざまな役割を経験することで、それぞれに応じた学びを得ている。
- キャリア系授業や PBL 授業でのグループワークやプレゼンテーションを通じて、「みんなが積極的にグループワークに参加できる環境を作った」といったリーダーシップの発揮や、「疑うことの重要性を学び、課題を発見する力が身についた」といった課題発見能力を培ったことが、就職相談やアンケートから分かった。
- ゼミでの発表や卒業論文の執筆を通して、「自分の意見を述べる力、まとめる力がついた」「他の人の発表を聞いて質問することは、就職活動でのグループディスカッションなどで役立った」といった声が聞こえている。
- 課外活動においても同様に、共学であれば男子学生が担うことが多い役割や業務も女子学生が担うことになり、上級生リーダーや各センターの学生スタッフ等を通じて、多くの経験や学びを得ている。
- 授業や課外活動等、自分が本気で取り組んだ経験を通して、学生一人ひとりが自分なりの学びを得て成長を感じている。加えて、学生同士で良かった点を伝えることや、教員からのフィードバック等を受けることの経験が、自信につながり、次の活動でも生かされ、自身の強みとして定着しているようである。
- このような力は企業側も高く評価しており、新入社員代表としてフェリス生に挨拶をしてもらったという報告ももらっている。
- 学びの広さに加え、経験する役割の広さがフェリスの魅力につながっていると感じている。
- 『フェリス OG のキャリアから学ぶ 人文・芸術系女子のキャリアのつくりかた』という書籍にて、フェリス生の卒業後の活躍が知れるので、ぜひご一読いただきたい。

5. 卒業後のキャリアパスについて:

K.R 氏（2015 年度 国際交流学部 国際交流学科卒業生）

経歴と現在の職業

- 2015 年度にフェリスを卒業後、立教大学大学院文学部超域文化学専修に進学。修了後、専門学校東京ビジュアルアーツ映画学科に入学し、映像系の仕事に就くために学んだ。
- 現在は、映像制作業界でフリーランスとして働いていて、テレビドラマ・映画・CM・ミュージックビデオ

などの映像作品を制作している。「演出部」に所属しており、主に監督の下で、監督の指示をいろいろな部署に伝えるサポート役を担っている。

- 映像制作業界に入った理由としては、「あってもなくても良い業界」「他人の生命を脅かさない仕事である」「フリーランスなので自由に休める」というメリットを感じたから。その反面、「とても過酷で、24 時間働くこともある」「仕事の指導を十分に受けられない」「フリーランスのため、給与の交渉やスケジュール管理、確定申告も自身で行う」というデメリットもある。

大学での学びが現在の仕事にどのように影響しているか / 在学生へのメッセージ

- 一言で言うと「すべて」。授業の内容だけでなく、資料検索・レポート作成・プレゼンテーション等、授業を受ける際に伸ばした力や、教職員との関わり、卒業後も付き合い合える友人ができたことなど、すべてが今の自分につながっている。
- 学生の頃は分からなかったが、「世の中は思っているよりも、たくさんの会社が関わって成り立っている」ことを在学生や新卒者に伝えたい。「大企業だけが就職先ではない」「やってみて、無理だったら辞めてもいい」ことも伝えたい。

6. 卒業生による在学中の学びの評価:

S.H 氏 (2016 年度 音楽学部 演奏学科卒業生)

経歴と現在の職業

2016 年度にフェリスを卒業後、株式会社サンライズプロモーション東京(キョードーグループ)に入社。企画部、総務部を経て、現在は劇場事業部で新劇場オープンに向けた業務を担当している。公演プロモーターの傍ら、フリーランスのヴァイオリニストとして、ソロ、室内楽、オーケストラ、アーティストサポートなどの演奏活動をしている。また、ヴァイオリン講師として、幅広い世代・国籍の方のレッスンを担当している。フェリスの学内演奏会ではエキストラ出演もしている。

学生時代の学び

- フェリスで学ぶにあたって行動指針としたのは、受験生のための講習会での音楽学部教員からの言葉「フェリスにはたくさんの宝物が散りばめられている。それを見つけて手に入れられるかどうかはあなた次第」であった。在学中は、専攻実技の技術向上、企画力の向上、音楽を通じて他者とつながる経験づくり、の3つの目的をもって、学内外の活動に取り組んだ。
- 主な履修科目は、実技科目、音楽科の教員免許取得に必要な科目、他学部他学科の科目等。学びたい意欲が強く、すべての授業に無遅刻・無欠席で取り組んだ。学びのアウトプットも重視し、学内外の演奏会に多数出演し、経験と実績を積んだ。
- 大きな挫折を経験したが、戸田弥生教授の演奏を聴き、モチベーションを取り戻すことができた後、特別講師による専攻実技特別レッスンを履修するなど精力的に取り組んだ。自らがオーガナイザーとなって学外でのリサイタルを成功させる体験を通して、「他者のために演奏する」といった視点をもつなど、「チームの力で人の心にアクションを起こしたい」という志をもつに至った。
- フェリスでの学生生活を経て、ヴァイオリンという一芸を武器に、あらゆることに挑戦できることを知ることができた。また、自ら成長機会を生み出す能力を得ることができた。

大学での学びと現在のキャリア

- 就職先での配属希望が叶わず、リアリティーショックに苦しんだが、勤務先が主催の音楽フェスでヴァイオリンを演奏する機会が転機となり、大学で学んだ音楽の専門的な知見を生かし、自身の活路を見出すこ

とができた。

- フェリスでのリベラルアーツ教育を通して培った「豊かな感性」を生かし、目先にとらわれず、中長期的な視点をもってモチベーションを保つことができた。また、アンサンブル科目を通じて、他者と力を合わせることで成果が倍になることを学んだ。

キャリアで感じている課題

論理的思考力：音楽を学ぶ上では感覚的な要素が多く、感性を養うことはできるが、論理的に思考する機会が少なかったため、社会に出てから課題と感じている。

日本語の言語能力：演奏技術を学ぶ上では言葉を話す機会が少なかった。円滑なコミュニケーションには日本語の言語能力が欠かせない。

演奏家のスキル向上：和声、ソルフェージュ、作編曲法などの学びを実践に移せるレベルまで引き上げ、楽譜作成のスキルや即興演奏のスキルを習得することで、ビジネスチャンスにつながると感じる。

セルフプロデュース力：演奏者の数に対して仕事の数が少ないため、一度引き受けた仕事を次につなげることが重要。「弾く」以外の場面で+が必要。現場でメリットのある人材でなければ、一度の仕事は次につなげることが難しいため、自身のセールスポイントや付加価値を創造できると良い。

7. 質疑応答

質問:

卒業生お二人の発表からは成功していることが伺えるが、一方で壁にぶつかったことや失敗したこともあると思う。そういった経験、またそれをどのように乗り越えたのでしょうか？

回答:

(K.R氏)最初の頃は、名前を覚えてもらえない、嫌われるといったことが多かった。仕事を円滑に進めていくためには、初対面の人や苦手な人ともきちんとコミュニケーションをとることが必要かつ重要であることに気づき、だんだんとそのスキルが身についていった。

(S.H氏)社会にはさまざまな人がいて、目を見ないで話すような人・場面に遭遇し、自分を出せなくなり、負のスパイラルに陥ることもあった。そのようなときは、ポジティブな出来事を書き留めたノートを見返すことで自分を励まし、過去の自分に支えられて乗り越えた。

質問:

苦手な人と接する際に気を付けていることはありますか？

回答:

(K.R氏)相手の名前を覚え、名前を呼んで自ら挨拶すること。自分のミス相手は怒るかもしれないが、相手がミスした時に自分は怒らず、寛大に対応することで、良い関係性を構築できるように感じる。

(S.H氏)その人の取扱説明書を作り、自分の仕事のやり方を相手に合わせて変えることで対応した。社会に出ると、相手に合わせて自身の考えややり方を変える必要性が生じる場面もあることを学んだ。

質問:

問題解決能力というお話がありましたが、既存の方法では解決できない課題に遭遇した時、どのように解決していくと良いでしょうか。

回答:

(K.R 氏) 稚拙でも構わないので、自分で思考し、自分の言葉で表現することが重要だと考える。

(S.H 氏) 最後まで諦めずに取り組むことが重要

質問:

フリーランスという働き方や複数の仕事をもつという新しい働き方を実践していて難しいこともあると思うが、コツなどはあるのでしょうか？

回答:

(K.R 氏) 映像制作業界は人手不足で、仕事がたくさん来てしまうため、努力して断ることがポイントになると思う。自身の能力だけでなく、ワークライフバランスも踏まえて仕事量を調整することがコツであると考えます。

(S.H 氏) 複数の仕事をする際には、互いの仕事をそれぞれに持ち込まないことを意識している。演奏家としての現場では日頃の仕事(プロモーター)は伏せるなど、仕事の結果にそれぞれの仕事の影響しないように留意している。

質問:

実習等、フェリスの教室外での学び・経験が、社会に出てから役に立つ場面はあったでしょうか？

回答:

(K.R 氏) 国際ワークキャンプ(インド)でインドの学生に「あなたは英語の問題ではない。コミュニケーションをもっと学んだ方がいい」と言われ、精神的にも大きなショックを受けたが、その経験がバネになり、その後の学びのモチベーションになった。振り返ると、良い経験ができたと感じている。

(S.H 氏) 学内での学びを学外でアウトプットすることに努めた。「キリスト教」で訪れた養護学校で実習をした後も、季節のイベントで学校を訪れて演奏会を行うなど、実践できたと感じている。

8. まとめと今後の展望: 荒井 真 大学FD委員会委員長(学長)

- 本日の講演を聞いて「チームワーク」と「自分を出していく」ということが重要であると感じた。「チームワーク」がないと仕事は進まないが、一方でその中に埋もれてしまっただけでは自分を出していけず、仕事にも生きてこない。
- 卒業生アンケートの分析結果から、仕事で重要な能力として「人にわかりやすく伝える力」「他の人と協力して共通の課題に取り組む力」が重要であることが示されたが、本日の両名の発表からもそれらが裏付けられたと感じる。
- 教室内の講義のみならず、社会との繋がりのある学びが重要であることを強く感じた。教室内でも問題解決型の授業を通して、他者と協調しつつも自身の意思をしっかりと卒業生をこれからも送り出していきたいと考える。

発表についての感想

卒業生アンケートの分析結果

学内

- どの大学でも当たり前のように起こることだと思っていたのですが、実際に数値にあらわされて出てきて納得がきました。
- 回答数が少ないので妥当性の問題はあるが、参考になった。
- アンケート項目の設定では、とてもご苦労なされたことと拝察いたしますが、結果の解釈も妥当だと感じました。

学外

- さらに詳しく聴かせていただきたい内容だと思いました。
- 発表側のスライドが投影されていたので発表スライドが小さく見づらかったです。事前に確認をお願いしたいです。
- 遅れて参加したため、見逃してしまいました。非常に興味がある内容につき、アーカイブで確認させていただきます。
- 本学でも卒業生アンケート導入を考えており、分かりやすく結果がまとめられていたり、仕事で重要だが大学で力を身に付けられたか、などのお話があったりして大変勉強になりました。感性も教養も学ぶというのが素晴らしいと思いました。
- 社会で求められている能力に基づいた議論ができていないような気がしました。
- 大学での学びに対して、社会に出てからのスキルの必要性の関連性が良く判りました。
- どのデータ、分析もすばらしいものだと感じました。わかりやすく伝える力と協働性が必要であるにもかかわらず大学で身に着けられたと感じていないという現状分析が、今後どうしていくべきかの教学改善につながる有用な導きであると思いました。

フェリスのキャリア教育・就職活動の紹介

学内

- 最近の動向を知ることができて、参考になった。発表者の話し方・日本語がとてもきれいだった。
- 就職支援に関する学生の満足度アンケート調査の結果がございましたら、それについても知りたいと思いました。

学外

- さらに詳しく聴かせていただきたい内容だと思いました。
- 現在の就活状況などが知れた良い機会となりました。
- 話し手の方の話し方や声がとても聞き取りやすく心地よかったです。プロだと感じました。キャリアに関する本を出版されているのは存じ上げず、この機会に知れてよかったですし、学生さんも幸せだと思いました。特に私自身が文系出身ですので、早くこの本に出会いたかったと思いました。総合職、専門職の方も多くおられ、卒業生のお話を聞ける機会があって、素晴らしいと思いました。
- 大学での学びとキャリアの接点がところどころ紹介されていた。
- 感性を育てる教育×実生活で必要に迫られる教育の二輪でどう動いていくか考えていきたいとお言葉と、本人の納得感、マッチ度を大切にされるお考えに共感しております。

K.R 氏

学内

- いろんな職種（会社勤めだけではない・フリーランス）を知る意味でいいと思う。
- K.R さんのような熱心な学生さんの率直なお話を聞かせていただき、この大学の教育の方向性は間違っていないような気がいたしました。
- 最近、テレビ関係の仕事をするのがあり、番組演出のコレクターの方が何日も寝ずに対応していると聞いていましたが、その話を思い出しました。

学外

- 率直にご経験を語られていて、たいへん参考になりました。
- 卒後しっかりと考え活躍されていると感じました。
- 良い事ばかりでなく悪い事なども発表され、自分の言葉で話しているのが伝わる内容でした。
- フリーランスとして個人でがんばっている、というだけでなく、学生時代や仕事につかれてからの失敗や経験などを「自分の言葉」で伝えられていたことは、学生さんにも参考になったのではないかと思います。
- 遅れて視聴したため、やむなく「どちらともいえない」チェックしています（気を悪くありません）。大学院 専門学校 フリーランスといったキャリアパスと、無限に広がりを見せている能力の開花（進化過程）に、興味大です。アーカイブを早く観たいです。
- この度は貴重なお話をいただき誠にありがとうございました。着飾らずまっすぐお話ただけて、フリーランスとしての強さや生き抜き方、自分ならではのキャリアの描き方等勉強になりました。プレゼン資料も見やすく、さすがメディア関係者だと感じました、おそらく同世代なのですが、このように力強く生きておられる姿に励みをいただきました。
- 留学の話はその通りだと思いました。それが大学教育で認識されないことが残念な気がしました。
- 大学での学びを仕事に生かしつつ、ご自分の目標を実現されている様子が良く判り、とても素晴らしいと思いました。今後も頑張ってください。
- 卒後の進路の可能性を広げるキャリアをご紹介いただき大変参考になりました。

S.H 氏

学内

- S.H さんが在学中色々なことに挑んでいる姿を拝見していたので、フェリスでの学びを糧に、今もキャリアを積みつつ演奏家としても活躍されていることにとても嬉しく思いました。
- とてもしっかりした報告（母校に役に立ちたいという気持ちが伝わった）で、業界について知ることができた。一生懸命準備して下さったと思うので、ありがたい！
- 演奏を志す学生にとっても、大学での学びの基本として、論文執筆などに携わることはとても大事だと思いました。

学外

- 素晴らしいご発表で感銘を受けました。
- 日の目の浴びない時期と割り切り努力を続けることは困難です。それを続けられたことは称賛に値すると思います。
- とても簡潔に分かりやすい内容でした。
- 「二足の草鞋」を履けること、そのためにはどんなことに留意・意識していくことが結果につながった、ことが自分の事に置き換えられるようにわかりやすく話されていたことが大変、参考になったのではないかと思います。
- スライドも内容も発表も素晴らしかったです。
- 本日は貴重なお話をいただき誠にありがとうございました。自分から機会を生み出すこと、演奏者としても

会社員としても、言い訳をせずプロ意識をお持ちなお姿、自分の目指す姿を叶えるためのキャリア戦略と最後まで取り組む根気強さと静かな、でも確かな根気にただただ頭が下がる思いです。ビジネスで論理的思考力、日本語の言語能力が必要だと感じた、という部分に、同じ会社員としてなるほど、と思いました。音楽分野に留まらず様々なパラレルワーカーやくじけそうな学生さんたちにお話をぜひ聞かせていただきたいと思いました。お話を聞かれる時のご姿勢やたたずまいが美しく、常にその場で必要な対応を取られるところがさすがのプロだと感じました。

- 就職してからのコミュニケーションの取り方はまさに学習能力だと思います。それを卒業までに察して成長させていける教育が必要だと感じました。
- 大学で学んだ様々な教えを実社会での仕事に生かし、生き生きと働いていらっしゃる様子が良く判りました。今後も頑張ってください。
- 目的をもって大学での学びを自らハンドリングする力に感銘を受けました。その力を下地とされ、現在もご活躍なのだと感じました。

勉強会全体に関する感想

勉強会全体に関する感想

学内

- 卒業生お二人の発表や言葉はそれぞれの個性が出ており、また、相澤先生からの質問で、フェリスの(教室外の)学びという切り口でのお二人の回答なども興味深く聴くことができました。上原先生からの質問が全く聞こえないところが何回もあり、もったいなく感じましたが、テーマや内容は大変面白かったです。
- 立派にご活躍されている卒業生を拝見しまして、嬉しく思いました。
- いずれのスピーカーの話も大変よかったが、よくある聞きっぱなしで終わる話の類で、入学式のあとにオリエンテーションできく先輩からの話を繰り返しきいているようだった。大学の学びが、相澤先生が指摘していたように、やや狭い解釈がみられた点ももったいなかったかなと思いました。
- 対面・オンラインの大変さが伝わったので、もう少しスムーズに進行してほしい。隣の教室で視聴者側の立場で確認する人が必要です(外部に公開するなら、必ず必要)。
- パワーポイントの操作をする職員は、カメラに映り込まずに別の場所から操作した方が画面構成として良いと思いました。音声についても複数の收音マイクを設置するなど、さらなる工夫が必要だと思います。
- 教員だけでなく、学生にとっても、将来を考える上でとても有益な内容だったと思います。またこのような試みが行われることを期待します。
- 本学での学びとキャリアについて、今後も卒業生を招いての講演会があるとよいのではないかと(卒業生アンケート回答者からだけでなく)。

学外

- このような卒業生の生の声を聞かせていただける機会は多くないので、良かったと思います。一方、卒業生調査のご報告をもう少ししっかり聞かせていただけると有難かったです。
- 開催場所とマイクの使い方およびスライド投影が気になりました。また改善いただけると気持ちよく視聴できますので宜しくお願い致します。
- 勉強会、FD 講演会として前半の紹介は必要かと思いますが、時間的に前半は表面的な発表になってしまったようでありますので、「集計結果・分析」の回と、卒業生による今現在と在学時の振り返りの「生の声」を聞ける回とできれば 2 回に分けて開催されると、より良かったのではないかと感じました。
- お二人の発表後、進行の方の質問が全く聞こえず、字幕機能を ON にしたのですが、だめでした。残念です。アーカイブが観られることも事前に告知しておいてもらえたらよかったです、外部の参加を認めてくださったことに深く御礼申し上げます。

- この度はご開催を誠にありがとうございました。ちょうど卒業生と在学中の学びについて考えたいと思っていたところで、発表を伺えて大変勉強になりました。キャリアやタイプの異なるお2人にお話いただけたことは大変貴重で、学生さんにとっても色々なロールモデルを見られたと思います。(私も非常に勉強になりました!)また勉強会がございましたらぜひ拝聴したいですし、私自身もご登壇のお2人と世代が近いので、キャリアを築く励みをいただきました。司会、運営もテキパキされていてあっという間のお時間でした。
- 在学生にとっては先輩の経験談話から、多くの気づきが得られるような素敵なイベントだったかと感じました。
- キャリアと学びの接続がもう少し明確になると良いと思いました。
- 四編の内容が、とても良くバランスが取れていて、貴学の取組みを良く知ることが出来ました。登壇された四名の方のプレゼンテーションは、とても良かったと思います。
- 音楽学部の演奏学科がかなりビジネスに密接に結びついている事を感じた。

以上

2023年度フェリス女学院大学FD講演会実施報告

大学FD委員会副委員長
教務部長 大畑 甲太

日程 2023年12月18日(月) 16:30~18:00

場所 オンライン (Zoom)

題目 授業における「社会連携」の実践に向けて
~フェリスの強みや特色をどのように活かすか~

対象 本学教職員及び博士後期課程学生

発表内容

- ・実践女子大学の事例紹介
- ・本学における社会連携・地域連携を取り入れた授業の紹介等

登壇者

深澤 晶久 氏

(実践女子大学 文学部国文学科教授・学長補佐・社会連携推進室長)

周東 正紀 氏

(学校法人実践女子学園 理事・経営企画部長・社会連携推進室部長・
キャンパス計画室部長)

ファシリテーター

事業推進担当副学長 藤巻 光浩 教授

出席者

専任教員 13名、非常勤講師 0名、博士後期課程学生 0名、職員 19名
(アーカイブ視聴:19名 視聴者のなかには当日出席者も含む)

講演会の概要

1. 開催にあたって: 藤巻 光浩 事業推進担当副学長

- 2025年度に学部学科の改組を行うが、新学部においては、社会とのつながりをより意識した教育を展開することをコンセプトの一つとして掲げている。
- 正課授業において社会・地域との連携を進めるにあたり、すでに取り組みを積極的に推進している、実践女子大学の取り組み事例を紹介してもらい、本学の今後の社会連携活動に活かしたいと考えている。

2. 実践女子大学の社会連携の取り組み:

周東 正紀 氏 (学校法人実践女子学園 理事・経営企画部長・社会連携推進室部長・
キャンパス計画室部長)

社会連携の目的

- 社会連携をすることが目的ではなく、「実践女子」のありたい姿(チャレンジ精神、多様化する社会で活躍できる、主体的に考え行動できる、課題解決力がある、実践力がある人材を育成したい)を実現するために行っている。
- もう一つの目的として、社会貢献を行うことで教育機関のミッションである社会貢献の実現やブランディング

グを強化することがある。社会連携が充実した学びをすることにより、卒業生にとって実践女子での学びが役に立って自己実現に繋がる、卒業生が勤務先で活躍する、学園との連携を希望する企業が増える、あるいは受験生やその保証人が実践女子大学で学びたい/学ばせたいと思ってくれることで、実践女子大学自体のブランディングが強化される。

社会連携活性化のポイント

- Point1. 全教職員の意識の共有 社会環境の変化や少子化等に伴う厳しい募集状況等の危機感を共有し、それを踏まえて変革の必要性を共有することが、社会連携の目的の共有に繋がると考える。これを、理事会、教授会、毎年のFDSD研修等を通じて、粘り強く伝え続けている。
- Point.2 TOPの強いコミットメント 理事長や学長がそれぞれ中期計画の中で「方針」を示し、強くコミットしている。また、理事長は「リレー授業（通称）」の企画立案にも関わっている。
- Point.3 中核となる教員の存在 社会連携のさまざまな活動を授業の中で行っていくことが非常に重要である。学生にとっては単位になるため、正課外の活動でいくつもプロジェクトを立ち上げるよりも、授業内で行うことが重要になり、それを実行するためには中核となる教員の存在が不可欠である。
- Point.4 教職協働での推進 教員だけで社会連携をすすめていくことは難しく、職員の関与が大切である。教員個々で実施している社会連携の取組が点と点の状態であったところを線と面でつなぐ役割を担うことを目的とし、社会連携推進室を3年前に設置した。当該部署では、企業・自治体と教職員のマッチングを行ったり、社会連携実績の発信などを行っている。
- Point.5 圧倒的な発信力（社会連携推進室と学園広報課） 社会連携推進室と学園の広報課が協働し、社会連携の特設サイトや学園ホームページを通じて、世の中に発信している。今年の指定校推薦入試では、ある学科の半分の志願者が「実践は社会連携が進んでいるから」という点を志願理由として挙げていた。実施したことは発信しないと伝わらないため、発信力も重要であると考えられる。

社会連携推進の状況

- 2022年度からの実績を含めて、企業・組織との連携実績は296件、のべ参加学生数は3000人。今年度の実績は、社会連携数120件超、のべ参加学生数5000人超の見込みである。
- 社会連携の定義
 - (1) 社会連携のパターン
 - 正課 最も事例が多く、参加学生も多い
 - 正課外 学生にとって、いかに魅力的かがポイント、出口にもつながることも魅力付けの一つ、コーディネートする教員等の力量がカギ
 - (2) 社会連携のヴァリエーション例
 - 単発の講演、事前事後学習付単発講演、アクティブラーニング形式（グループワーク等）単発講演、半期（1単位）PBL、数年にわたるプロジェクト（商品開発等）
 - 単発の講演も大きなプロジェクトも社会連携である。学生にはさまざまなタイプがいることも踏まえ、多くの学生が参加できるように、いかに量とヴァリエーションを豊富にできるかが重要である。
 - 数年にわたるプロジェクトや複数の社会連携のプロジェクトが動く場合は、連携協定を締結している場合もある。
- 社会連携取組事例
 - (1) サントリーホールディングス：1年生向け授業の「実践プロジェクトa」。テーマは「新入社員の研修計画を提案せよ」。最終発表はPPTを用いプレゼンテーションを実施。
 - (2) 資生堂：2年生向け授業の「実践キャリアプランニング」。テーマは「ニューノーマル時代のメーカー商品を開発し、その販売促進計画を提案せよ」。
 - (3) オリエンタルランド：3年生向け授業の「キャリアデザイン」。テーマは「パーク内でのフード客単価

を『最大化』させる施策を提案せよ！』

- (4) 日本ロレアル(ロレアルパリ): テーマは「人権問題を意識し配慮の足りた広告を作るために大切なこと」。学生がプレゼンし、過去のCMなどと比較しながら発表を行った。
- (5) JR×博報堂: 渋谷駅新南口において、リラックスできるようなスローな場所づくりをJR・博報堂と企画。リーフレットを作成し、渋谷駅にて展示。
- (6) K.UNO×リクルート×長岡造形大学×実践女子大学: 「新しい時代のブライダルジュエリー」をテーマに学生が新企画を提案。初の試みとして新潟の長岡造形大学及び産業界との合同で、オンラインによりプロジェクトを実施した。
- (7) カルビー: 卒業生からカルビーのSDGsへの取組を聞き、その認知度アップのアイデアを提案した。
- (8) ホリプロ: 人事部と役員による講演。業界の特性や働く魅力、仕事に対するモチベーションの在り方などの講演。
- (9) 山崎製パン: 中高生徒がランチパックのオリジナル商品を企画し、学園祭にて販売。
- (10) 渋谷区: 渋谷区のスタートアップ支援を推進している田坂氏より、女性起業家育成についての講演を実施。渋谷区とは、PBL(問題解決型)授業やイベントも随時実施している。
- (11) 「女性とキャリア形成」: 現理事長が企画・立案したプログラム。アフラック生命保険、ANA、日本銀行、サントリーホールディングス、資生堂、スターバックスジャパンなどの企業トップによるキャリアに関する講演。

3. 社会連携について～ある授業のご紹介～:

深澤 晶久 氏 (実践女子大学 文学部国文学科教授・学長補佐・社会連携推進室長)

社会連携を取り入れている、ある初年次教育科目の紹介

- この授業は、共通教育のキャリア教育科目に配当されている1年生前期向けの科目で、一般社団法人フューチャースキルプロジェクト研究会 (<https://www.benesse.co.jp/univ/fsp/>) が構築した初年次教育科目。当研究会は、大学教育を大学と企業が同じ土俵で考える、また大学教育から学ぶことをテーマとしている。一つの授業は前半・後半で構成され、それぞれ別の企業に協力いただき、企業の出したテーマの解決に向けて学生が考えるPBL型の授業である。テーマは、実際に企業が抱えている課題となっている。
- 定員は30名の科目だが、初年度(2020年度)の履修者数は13名だった。先輩学生が履修相談等を通じて後輩学生に履修を薦めたことにより、2022年度からは定員を満たすようになった。
- 前半: 近畿日本ツーリスト株式会社
テーマ: 千葉県の市場を分析し、地域、パートナー企業・団体、近畿日本ツーリストが連携した「ワーケーション」プランを企画せよ!(2020)
観光の力で、観光需要の回復・地域経済の活性化を解決せよ!(2021)
若者が、何度も通う旅・帰る旅の企画作成!(2022)
伊豆七島を「若者が20代に必ず一度は行きたい」と思ってもらえる聖地にするためのプラン(2023)
- 後半: サントリーホールディングス株式会社
テーマ: サントリー社員として、企業人・社会人に求められるものを考察し、新入社員の育成について、具体的な施策を提案してください。(2021~2023)
- 事前事後アンケート(35問)の結果、スコアが大きく上がった設問(上位5項目)
述べられている根拠や理由は、確かな情報源をもとにしたものかを考えながら読む(聞く)
社会人と学生とで、職業に関する責任感や考え方がどのように違うかを理解している
自分が何をしたいのか、常に意識しながら行動している
常に自分の意見を持ち、自分の意見が周りとは違った場合でもはっきり意見する

述べられている根拠や理由と結論の間に、飛躍がないか考えながら読む（聞く）

まとめ

- 90名の1年生と過ごしてきた中で感じることは、「無限の可能性」。
- きっかけがあれば、環境を提供すれば、学生はその経験をもとに「一皮むける」。
- 昨年からは、入学のきっかけにこの授業を挙げる1年生もいる。
- 地道に、一人ひとりの学生と向き合っていきたい。

4. 質疑応答

質問:

授業実施に係るマニュアルがあるとのことですが、どのように作られて、どのように活用されているのでしょうか？

回答:

当該授業は今年度前期で20大学が取り入れて実施しているが、このような形態の授業の実施経験がない大学・教員も多くいる。そのような方も実施できるようなマニュアルになっており、コマごとに実施する内容が詳しく記載されている。初めての大学・教員を対象に研修も行っており、それを受講すれば実施できるようになっている。協力いただける企業(2社)は各大学で見つけていただく必要はあるが、教員向けのマニュアル、学生の使用するテキストは揃っている。

質問:

1年次生は入学してすぐに履修科目を選択・決定しなければならないが、入学前の情報提供や履修の推奨等、高校生向けにどのような広報をしているのでしょうか？

回答:

- オープンキャンパスの「学校紹介」の中で、かなりボリュームを割いて案内している。また、社会連携に関するリーフレットを作成し、配布している。企業からのゲスト講師を呼んだことをInstagram等、SNSで発信することによって、実践女子大学は社会と繋がっている、企業と接点を持ちながら授業を実施していることが伝わっているのではないかと感じている。
- 授業を履修した先輩学生が、履修相談ウィークの際に当該授業について紹介してくれている。実際に履修した学生による説明のため説得力があり、新入生の履修に繋がっている。

質問:

建学の理念と深く関わっているのでしょうか？

回答:

建学の精神を「女性が社会を変える、世界を変える」と謳っていることもあり、社会と繋がる必要があると考えている。また、「実践女子大学」という名前に、世の中が「実践する」「実践力」を重視し、世の中が追い付いてきている。「女性が学問を身につけて、それを実践していく」という創設者のメッセージと社会連携は繋がっていると考えている。

質問:

人間社会学部では、すでに社会連携が進んでいるとのことですが、文学部(美学美術史学科、国文学科、英文学科)ではどのような取り組みをされているのでしょうか？

回答:

1年次生の入門セミナー（レポートの書き方、自校教育）やキャリア教育に関する担当科目の中で2年次生は「キャリアオリエンテーション」を設け、職員からはこれから始まる就活に関する説明を行い、教員からは授業の案内を行っている。さらに、文学部生のみが履修できる「文学部キャリア科目群」をいうものを作り、来年度から運用していく予定である。

英文学科では専門性と少し離れるがinstagramを作ることに取り組んでいる。専門性と繋がるのが理想ではあるが、いろいろなトライアルを各学科で行っているところである。美学美術史学科では、K.UNOさんと連携し、ブライダルジュエリーのあり方の提案に取り組んでいる。国文学科では、国文学を取り入れている企業と連携し、国文学を企業経営に生かしている企業があることに気づいてもらう取組をしている。「大学で学ぶことが、どのように社会で生かせるのか」という疑問に対し、このような取組みで答えている。

質問:

ここまでの実績を上げるまでに、検証し見直しをされたことはあるでしょうか？また、社会連携を進めるための財政的な措置を講じたことがあるでしょうか？

回答:

- 社会連携推進室は3年目を迎えたところで、案件数や社会連携に関わった学生数については目標値を設けて取り組んでおり、順調に推移しているため、現時点では見直しはしていない。
- 経常費とは別に、学園としての競争力を強化する経費を別枠で計上している。その中から、社会連携強化の予算をつけ、外部講師の招聘に係る費用等に充てている。

質問:

PBL型の授業を取り入れることが初めての教員に対して、マニュアルの整備や技術的な支援を行っていらっしゃいますが、抵抗意識のある教員への働きかけ等、何かご努力をされていますか？

回答:

社会連携推進室を設置して3年経過し、FDの年間計画には必ず「社会連携」を入れていくことで、だんだんと各学科の社会連携の取組が進んできている。少しずつでも積み重ねていくことが重要だと感じている。高校の探究学習が進んできているので、教員側がすべて教えなくても、高校での学びからの連続性で学生が自ら動いていく素地ができつつあると感じている。

質問:

企業側はフェリスの名前を商品名に入れようとしてくださるが、学内からは「フェリス」と入っていたら買ってくれないのでは、という意見があった。広報とこのようなプロジェクトとの関係性はどのようにお考えですか？

回答:

実践女子学園の中高生が山崎製パンと商品開発に取り組んでおり、商品名に大学名が入っている。学内からも学校名が入っていることに関して特段意見はない。また、実践女子大学以外の学校名が入っている商品でも、同じ大学人として興味が湧き、購入に至ったことがある。大学名を入れることはマイナスではないと感じている。

質問:

成績評価にルーブリックを用いていますか？

回答:

授業支援システム「manaba」で毎回アンケートをとっており、学生の到達度が確認できる。他にも期末レポートを課している。コンテスト等で優秀賞を取得したことが高評価に繋がるわけではなく、そこに至るまでの活動内容を評価していることを学生にも明示している。

発表についての感想

周東 正紀 氏

- とてもわかりやすく、どのように実践していらっしゃるのか、とても参考になりました
- 大学としての取り組み（真剣さ・やる気）が伝わって、素晴らしいと思った。
- ゲスト講義（1回のみ）も含め、すべてを社会連携のウェブサイトにご掲載していらっしゃる点は素晴らしいと感じました。（原稿の準備を職員様方がご支援・ご尽力なさっておられると拝察いたします。）

深澤 晶久 氏

- とてもわかりやすく、どのように大学と社会が連携するのか、その仕組みを理解することができました。
- 社会連携について立ち上げた本人の具体的な話は、大変参考になった。
- 受講生たちのその後の成果をきちんとフォローいってるところに感服いたしました。

発表及び勉強会全体に関する感想

発表及び勉強会全体に関する感想

- とても良い勉強会だったと思います。本学では学生のボランティア活動も活発ですし、そのようなことが得意な学生が多いように思います。現在、議論が始まっています障がい学生に対する対応についても、社会と連携して何かできることの1つのようにふと思いました。（具体的にはまだ明確には浮かんでませんが...）
- 進行やハイブリッドの配信なども含めて、前回 12/13 よりスムーズで良かった。
- 実施している内容自体はフェリスとあまり変わらないと感じたが、やはり組織的な「発信」がお上手だと感心した。また、教員の専門性を社会連携担当職員が把握して、企業や高校に営業できる（マッチング）効果はフェリスとは違うなと思った。
- 社会連携というと協定書を結んで実施していくような仰々しいものを想像しがちだが、授業の一部の回に取り入れるなどちょっとしたものでも問題無く、むしろそういったものを積み重ねて、いかに広報に結び付けていくのかという観点をもつ必要があるように感じた。また、過去の履修者の口コミがベースになって科目の履修者が伸びる側面があるということだったが、社会連携をしていけば自ずと学生の興味関心を惹くというわけではなく、科目や授業の中で学生の興味関心を惹く工夫がされているのではないかと推測した。そのあたりの工夫がもしあれば伺いたいと感じた。
- 学生募集が好調な実践女子大学の社会連携の取り組みを学び大変参考になった。1年生の企業を交えた PBL の取り組みは本当に素晴らしいと思いました。社会で必要とされるスキルや知識を、座学でなく実感として体験できると4年間の学びの質は変わると思います。小さな社会連携も公表し、情報共有、広報することが重要と感じました。また、もっと多くの教職員が参加しているとよいと思いました。
- 大学だけではなく本部にも詳細を共有していただきたいと思いました。
- 女子大学としての社会連携の取り組みについて考える良いきっかけになりました！

以上

2023 年度アセスメント報告会 実施報告

大学 FD 委員会副委員長
教務部長 大畑 甲太

日程 2024 年 3 月 13 日 (水) 15:00 ~ 16:30

場所 オンライン (Zoom)

題目 アセスメント・テスト分析報告会 ~ 本学で教学マネジメントをどのように実現するか ~

対象 本学教職員及び博士後期課程学生

発表内容

- ・ 高等教育における教学マネジメント / 学修成果の可視化の必要性と、
- ・ GPS-Academic を用いた可視化の可能性
- ・ アセスメント・テストの分析結果の説明
- ・ カリキュラムやプログラムの見直しに向けた問題提起
- ・ 今後の展望

登壇者

嶋原 ゆり氏

(ベネッセ i-キャリア 大社接続事業本部 大社接続営業部 CS ユニット 東日本カスタマーサクセス課)

高橋 広平氏 質疑応答のみ

(ベネッセ i-キャリア 大社接続事業本部 大社接続営業部 CS ユニット 東日本カスタマーサクセス課長)

講演会の概要

1. 開催にあたって: 荒井 真 学長

- 高等教育の現場では、教学マネジメントと学修成果の可視化がますます求められている。
- 本学では 2022 年度まで学修行動比較調査を実施し、学生の自己認識や学ぶ態度などの学生の主観による調査をこれまで行ってきましたが、昨年度受審した大学基準協会による認証評価において、学修成果の測定が不十分であることが指摘された。
- その対応として今年度から新たに、株式会社ベネッセ i-キャリアの GPS-Academic というアセスメント・テストを導入し、現在の 1 年次生及び 3 年次生に実施した。このテストでは、学生が自らの成長を客観的に評価することができ、その要因を主観的に把握することができる。
- 今回は、その結果分析を学内で共有し、そこから見えてくる課題を認識することで、その先にあるカリキュラムやプログラムの改善というアクションにつなげていく契機にしたい。

2. アセスメント・テスト分析報告:

嶋原 ゆり氏 (ベネッセ i-キャリア 大社接続事業本部 大社接続営業部)

はじめに

- ベネッセ i-キャリアは、教育に強みを持つベネッセと就職・採用支援に強みを持つパーソルキャリアの合併会社である。

- 「学ぶ」と「働く」をつなぐことを企業理念に掲げている。
- ベネッセ i-キャリアは、大学・学生に対し、育成・可視化・マッチングの3領域で支援を行っている。
- フェリス女学院大学は、2023年4月より GPS-Academic(問題解決能力を測定するアセスメント・テスト)を導入した。
- ベネッセ i-キャリアは、2023年夏頃から、教学マネジメントの実現に向けて、学長室と議論を重ねてきた。

高等教育における教学マネジメントの必要性

- 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン答申」では、予測不能な社会に生きていける人材の育成が必要とされている。
- 同答申では、学習者本位の教育への転換、教育の質保証と情報公表が求められている。
- 「教学マネジメント指針」では、学修成果の可視化から情報公表までのマネジメントサイクルが示された。
- 「学習者本位の大学教育の実現に向けた今後の進行方策について」では、教学マネジメントの実質化に向けた対応の二極化が指摘された。

GPS-Academic による可視化

- GPS-Academic は、高校・大学・社会で一貫した指標を用いて測定可能である。
- 汎用的な問題解決能力を測定し、現状を把握できる。
- 客観評価・主観評価・意識調査を組み合わせ、多面的に可視化できる。
- 思考力(批判的思考力、共創的思考力、創造的思考力)、姿勢・態度(リーダーシップ、コラボレーション等)、経験、学生意識調査を測定項目としている。

受検結果報告

- 1年生:431名、3年生:441名が2023年4月~5月に受検した。
- 1年生の受検結果は、学部別の特徴(批判的思考力:音楽学部、共創的思考力:文学部、コラボレーション:国際交流学部)が見られた。
- 3年生の受検結果は、1年生と同様の学部別の特徴が見られた。
- 学生意識調査の分析では、他大学への編入学・退学の検討と入学時の志望度の関連性、成長実感と学習意欲・授業参加態度等の関連性が示唆された。
- また、成長実感が低い学生は、進路に対する不安が大きい傾向が見られた。

受検結果と DP との関連

- GPS-Academic の測定項目は、大学の DP とマッピングされた。
- 批判的思考力、自ら課題を発見する力等が DP と関連していることが示された。
- 3年生の測定結果と DP の照合により、卒業までに伸ばすべき力と教育方法の議論につなげることができる。
- DP に関連する項目と学習習慣の関連性が示唆された(批判的思考力とノートテイクの習慣、リーダーシップと教員への質問・相談の習慣)。

今後のデータ活用に向けて

- アセスメントプランの策定により、いつ、どこで、誰が、何を、どのように測定するかを明確化する必要がある。
- 京都産業大学の事例を参考に、アセスメント・ポリシーを見直すことが望ましい。

- 日本大学危機管理学部の事例を参考に、保護者向けの情報発信を検討することが有効である。

4. 質疑応答

質問:

入学時は一般入試の学生のスコアが高く、3年次では推薦入試の学生のスコアが高くなっているが、この違いは本学の特徴なのか、一般的な傾向なのか。

回答:

他大学でも同様の傾向が見られる。入学時に高かった学生のスコアが下がり、低かった学生のスコアが上がることで、真ん中で一致するようなケースもある。周りの環境や友人関係に影響されて、学びの意欲や姿勢が変化するためと考えられる。

質問:

成長実感がある学生はチャレンジできるが、成長実感がない学生はチャレンジしづらいという関連性は実証されているのか。またレジリエンスなどは定量的にどのように測定しているのか。

回答:

- 成長実感が高い学生ほどチャレンジに取り組んでおり、低い学生はチャレンジができていない傾向がある。
- レジリエンスの測定は、3つの設問から最も当てはまるものと当てはまらないものを選ぶ選択式で行っている。自分を良く見せるのが難しい問題設定にすることで客観評価としている。

質問:

GPA と GPS-Academic との相関や評価する能力の違いについてご教示いただきたい。

回答:

GPA と GPS-Academic の相関は大学によって異なるが、本学では緩やかな相関が見られた。GPA は授業での頑張りを評価しているが、GPS-Academic はリーダーシップや経験の前向きさなど、GPA とは異なる能力を測定していると考えられる。

質問:

文学部で共同的思考力のスコアが高いが、批判的思考力や創造的思考力との違いは何か。

回答:

共同的思考力：他者との共通点や違いを理解する力。グループワークやディスカッションの場面で働く。

批判的思考力：物事の課題を抽出し吟味する力。物事の始まりの段階で使われる。

創造的思考力：情報を関連付けたり類推したりする力。批判的思考力で課題を見出し、共同的思考力で議論した後に、新たなアイデアを生み出す際に働く。

文学部の教育内容を見ると、どのような力を伸ばしているのか推測できるかもしれない。

質問:

テストのスコアを伸ばすために具体的に何をしたら良いのか。また、スコアの伸びは大学の成果なのか、それ以外の要因なのか。

回答:

- 福井大学の事例では、1年次から課題研究プロジェクトを必修化し、分野融合の多様な科目で主体的な学びを促進している。また留学制度の活用により、異文化に触れることでレジリエンスが養わ

れたと考えられる。他大学の事例でも、1年次に基礎科目を徹底させることで、学生の興味関心に基づいた学びにつながっているケースがある。

- スコアの伸びには、大学の教育だけでなく、アルバイトや友人関係など様々な経験が影響していると考えられる。ただし、大学や学部ごとに伸びの度合いが異なることから、教育の影響も大きいと推測される。今後、学生の変化を継続的に見ていくことで、より詳細な分析が可能になるだろう。

質問:

(上記の回答を受けて)

- 福井大学の事例は、授業を受けたから伸びたのかどうかは確認できていないのでは。
- 全国データの分析で、議論する経験と能力の伸びに相関があるとのことだが、実際に議論する授業を取ったかどうかは確認しているのか。
- PBLについて、社会連携などの外部との連携が重要なのか、議論をすることが重要なのか、区別して分析しているのか。

回答:

- 現時点では、学生の行動ログは取っておらず、アセスメントの回答から分析している。
- 議論する経験を学生がよくしたと思っている場合に、能力が伸びる傾向が見られるのが現状。
- 今後、学生がどのような行動をとったかを大学と共同研究しながら分析していく必要がある。
- PBLについても、積極的に取り組んでいる大学で伸びている傾向は掴んでいるが、具体的にどのようなPBLが効果的かは今後の研究課題である。

アンケート集計

発表についての感想

- 他大学と比較のうえで本学もしくは各学部の特徴に触れていただいたこと。また、退学率の改善へのアプローチ方法など具体的な提案も盛り込まれており、参考になることが多くあった。
- 最近の大学や学生の動向や特徴が見えない部分があるため大変参考になりました。データに基づいて、フェリスの現在の状況にどうしたらよいかということのを的確に指摘して下さったと思います。
- とても分かりやすく、事前に資料もあったのでよく理解できた。キャリア志向など学生のニーズに合ったカリキュラムの必要性について意識が高まりました。

発表及び勉強会全体に関する感想

発表及び勉強会全体に関する感想

- フェリスの状況だけではなく、講演や質疑応答の中で様々な大学の事例を踏まえて説明されていたため、議論を深めるための切り口をたくさん提供していただけたと感じる。GPS-Academicを採用する第一義的な目的は、客観性をもって学修成果の可視化を達成することだとは思いますが、他大学と比較して本学の特徴を把握することの他、学修活動の改善や広報などこの結果をどのように活用していくのか様々な可能性が垣間見えた。業者としてもこれから深掘りし、把握していく部分も多いようなので、今後の情報提供等にも期待したい。

- 対面、オンラインのハイブリッド形式であるために致し方ないことではありますが、オンラインではベネッセi-キャリアの方のお声が小さく、聞き取りにくい時間がありました。ハイブリッド形式にしたのは理由があると推測しますが、この時期に開催でしたらオンラインのみとしリスクを軽減する考えもあるかと思いました。(運営する方々はいろいろ大変だと重々承知しております。)
- フェリスの良い点を後押ししていただき、寄り添ってくださるお気持ちがとても励みになりました。
- 学生の成長実感が可視化できるのはとても良いと思う。加えて、本学の強みや特徴などが浮かび上がってくる分析結果を期待したい。
- 回答の母数によっては志向が変わったことも考えられますが、活動的で立体的な授業への参加に充実感を得ていることがわかり、参考になりました。一方で自身の領域でどのような可能性があるか、なかなか発想に至らず、もどかしい思いも持ちました。

以上